

2022年7月31日～8月6日 各家庭でのディボーション用テキスト

愛銭者 問題の本意が分かった。諸君の許しを得て、答えを作るよう骨折してみよう。まず第一に、牧師自身に関する質問に対して答えるなら、かりに牧師がりっぱな人でありながらほんの少ししか俸給を受けていないとする。そして遙かにゆたかな俸給を望んでいて、今やそれを手に入れる機会はあるが、もっと勉強し、もっと数多く熱心に説教し、また人々の気質が要求する以上は、多少自分の主義を変えなければ手に入らないとする。私に言わせると、(彼が召命を受けているなら) そうやったって少しも構わない、いや、そのほかもっと沢山やっても、やはり正直者だ。というのは、

一、一層大きな俸給が神慮によって目前におかれた以上、それを望むのは正当だよ(これに反対はできない)。だから、できればそれを手に入れてもいいわけだ、良心のために疑問など起こさないでね。

二、のみならず、そういう俸給を欲する心から彼は一層勉強し、一層熱心な説教家になり、こうして一層よい人間になる、いや、彼の才能は進歩する。それは神のみ心にかなうことだ。

三、さて信者たちに役立つよう、自分の主義を多少曲げて、その気質に従うことについて言えば、これは次のことを証明する。

(一) 彼に克己心があること。(二) 優しく人を引きつける態度があること。したがって、(三) 聖職に一層適していること。

四、そこで結論を言うと、少ない俸給を大きなのと取り換える牧師は、そうしたからといって欲張りだと判断してはならない。いやむしろ、それによって才能と勤勉とを増進した以上、彼は自分の召命を励み、授けられた善をなす機会を追求する者として考えるべきである。

さてまた問題の第二部、君の言った商人に関するものに対しては、こうお答えしよう。かりにこのような人で商売が振るわない場合、信心深くなることによって売行きがよくなり、ことによったら金持ちの妻を貰い、遙かに上等のお客が一層多く店に来るようになるでしょう。私に言わせると、このようにするのは正当でないなどという理由が分からないね。そのわけは、

(一) 信心深くなるのは、どんな手段によっても、一つの美德だ。
(二) 金持ちの妻を貰ったり、お客が一層多く店に来たりするのも不法ではない。
(三) のみならず、信心深くなることによってこれらのものを得る人は、自分が善くなることによって、善い人たちからよい物を得る。だから、ここにはよい妻があり、よいお客があり、よい利益があり、それというのも皆信仰深くなることによるもので、これもよいことなのだ。それ故、信心深くなって、これらすべてを得ようというのは、利益になるよいもくろみだ。

このように愛銭氏が私心氏の問題に与えたこの答えは、皆からやんやとほめそやされた。そこでこの答えは大體極めて穩健で好都合なものと断定された。彼らの考えでは、だれもそれに反対はできないし、基督者と有望者はまだ呼べば聞こえる所にいたので、二人に追いついたらすぐこの問題で攻めたてようということに一同の意見が一致した。ことに二人が私心氏に反対したことがあるのでなおさらのことであつた。そこで彼らは後から呼びかけた。二人は立ちどまって、彼らが追いつくまでじっとしていた。ところで彼らが道々取り決めたことは、私心氏ではなく年寄の現世執着氏が問題を出すというのであつた。彼に対する返事なら、少し前別れる際に私心氏と二人との間に交わされた論戦の余熱もなかろうと思つたからである。

こうして彼らは互いに近寄って、短い挨拶を交わした後に、現世執着氏が基督者とその仲間に問題を出し、できれば返事して欲しいと言つた。

そこで基督者は言つた、宗教については赤ん坊のように幼稚な者でも、こんな問題なら一万でも答えることができます。もしパンのためにキリストに従うことがよくないとすれば（實際そのとおりですが、ヨハネ第六章）この世をもうけて享樂するためにキリストと宗教をだしに使うことは、なおさら言語道断のことではありませんか。このような意見を持つ者は異教徒や偽善者や悪魔や魔女のほかには見当たらないのです。

一、異教徒と言つたのは、ハモルとシケムがヤコブの娘と家畜とに気があつて、割礼を受けるよりほかには、それに至る道はないと見たとき、彼らはその仲間に言つたものです、もしわれわれのうち男子が皆彼らのように割礼を受けるならば、彼らの家畜も財産もすべての獣もわれわれの物となるのではないかと。その娘と家畜とは彼らが手に入れようと欲したものであり、宗教はそれに近づくために利用した「隠れ馬」でした。その話をすっかりお読みなさい（創 34:20-23）。

二、偽善的なパリサイ人もこの宗教を持っていました。長い祈禱は彼らの見せかけで、やもめの家に入り込むことがその目的でした。神から来る「もっときびしいさばき」こそ彼らの受ける罰です（ルカ 20:46-47）。

三、悪魔ユダもこの宗教をもっていました。彼は財布のために信心深かつたのですが、それはその中にある物を手に入れるためでした。しかし彼は滅び、見捨てられました。まさに滅びの子です。【ヨハ 17:12】

四、魔法使いのシモンもこの宗教を持っていました。彼は聖靈を得ようとしたが、それで金もうけをするためでした。ペテロの口から下された宣告は適切でした（使 8:19-22）

五、私の念頭を去らないことは、この世のために宗教を取り上げるような者は、この世のために宗教を捨てるということです。確かにユダは信心深くなつたとき、この世を捨てました。が、それと同じく確かに彼はこの世のために宗教と主とを売つたのでした。それ故その問題に肯定の答えを与えることは、（察するところ君たちはそうしたようですが）、また、そのような答えを拠り所あるものとして承認することは、異教的で、偽善的で、また悪魔的です。そして君たちの報いはその行ないしだいです。

【ジョン・バニヤン 天路歷程 正篇 より】

※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい